

反障害通信

14. 11. 28

49号

ストップ ザ・アベノムチャクチャ政治

どう考えてもおかしな政治が、まかり通っています。

アベ政権の経済政策は、アベノミクスという言葉で表され、それは経済成長戦略として突き出されてきました。

その成長で、閉塞感を覆っている「国民」の生活が好転するという幻想をふりまき、それなりの支持を得てきたのです。その政治を見ていると、わたしは「ハダカの王様」の話を思い出してしまうのです。「ハダカの王様」には「ハダカだ」といって、みんなで呪縛から解き放たれなくてはなりません。

アベノ政治のキーワードのアベノミクスになぞらえて、その政治をアベノ政治としてその内容をとらえてみます。

アベノミクスの破綻の露呈

アベノミクスは、そもそもマクロ的な経済を押さえていません。今、世界的に進んでいるグローバルゼーションという資本主義の経済は、資本主義に取り込まれていない地域を資本主義経済に取り込むことによって、経済の成長を可能にします。その取り込みが進むにつれて、経済の伸びしろは減少していきます。経済成長が今一番進んでいる中国は資本主義経済により純化して転換していくところにおいて成長があるのであって、それが進んでいく中で、成長は頭打ちになっていきます。グローバルゼーションの時代の資本主義は経済成長を少しでも確保しようとする、外国への収奪と国内的な収奪を強化する、格差を広げていくしかありません。まさに、そういうところで矛盾が拡大していきます。その抜本的な解決の途がとられなくなると、出口のないテロリズムを生み出します。それが自爆テロに現れています。また国内的には、差別の反作用としての自死や自滅的犯罪の反作用が起きてきます。

そこで、その矛盾を押さえ込むには、情報の隠蔽や強権的弾圧システムを作っていく、また、矛盾を差別に転化していく、排外主義を煽り、ファシズムや戦争の途に進まざるをえなくなります。

そういうことを押さえるならば、もはや経済成長戦略など幻想に過ぎないととらえかえさねばなりません。資本主義が生き延びるためには「持続可能な」経済政策しかないのです。

それなのに、アベノミクスはその経済成長戦略をかかげているのです。その経済成長戦略の中身は、株価操作や赤字財政覚悟の公共事業投資なのです。「財政健全化」というところで消費税をあげる反動での経済の落ち込みを防止するためにと、昔ながらの公共投資を

やったから、一定経済の落ち込みが押さえられただけです。成長戦略を掲げて、赤字覚悟で財政投資をしていけば、国債の評価下落でのパニシングポイントへ近づいていきます。

で、何のために消費税をあげたのでしょうか？ かつては、福祉目的税として「国民的合意」をとりつけた消費税だったはずですが。もはや、これもかなぐり捨てました。アベノミクスが最初にやったのは、最後のセーフティネットとしての生活保護の切り下げでした。

デフレ脱却としての円安操作で、潤ったのは大企業の一部で、中小企業や労働者は成長経済など自分たちには届いていない、逆に生活が大変になったという実感しかありません。

そもそも経済成長の三本の矢の最後の3本目の「雇用の拡大と労賃の上昇」など、資本主義経済がどのようなところで動いているのか分からない戯言なのです。資本主義社会の企業は資本の論理で動いています。企業は慈善事業をやっているのではなく、目先の利益を求めているのです。目先の利益を飽くなく追い求めるのです。資本主義の論理の極として現れている投資ファンドに倫理を求めて、「天下国家」を論じて、「社会のことを考えて欲しい」といって、説得できるのでしょうか？ 原発の再稼働で電力資本が、うそとごまかしで再稼働策動しています。事実上、結局投資した元手を取りたいというところで、過去の反省や危険などうち捨て、「社会的責任」などかなぐり捨てて、突き動いていることにそれは端的に表れています。

成長の可能性があるのは、エネルギー革命にあるのかも知れません。アメリカの経済が少し持ち直したのは、シェールガスが軌道に乗ってきたところにあるのではと思っています。これとて、大幅な技術革命とそこでの経済成長があるわけではなく、また所詮化石燃料で、地球温暖化がどうなっていくのか、という処をスポイルして資本の論理で動いて行くことでしかありません。再生可能エネルギーというところでの、エネルギー革命が必要になっているのです。ところが、電力会社はそもそも原発でもうけるために、再生エネルギーの開発ということをして、フクシマ以前につぶそうとしてきたし、フクシマのあとも投資のもとをとるために再稼働策動しています。それで、電力会社は再生エネルギーへの転換を阻止しようという動きさえ出してきました。だから、政治の力でエネルギー革命の途を探らねばならないのに、アベノミクスにはそういう方針は出てきません。大企業の目先の利益のための政治を相変わらず続けようとしているのです。

アベノ政治として現れていることに外国詣でがあります。ひとつは排外主義的な中国包囲網を形成しようという策動がありますが、もっぱら財界の政治営業本部長として、輸出産業—大企業のための売り込みに回っているのです。しかも、事故の原因調査もないがしろにした「世界に誇る技術」という大うそでの原発売り込みや、死の商人と批判される武器の売り込みまで手を付けています。第一次安倍政権の標語は「美しい日本」でした。まさに「汚い国日本」と批判されることを考えないのでしょうか？ 金儲けのためならなんでもするのでしょうか？ まさにそれが目先の利益を追い求める「資本の論理」で動いて行くようになるのかの象徴です。

アベノ政治は、派遣法の改定策動、法人税引き下げ策動、その他、まさに大企業のための政治をやっているのです。格差がまた広がっていています。そして、そこに住むひとの生活の破壊やいのちを危険にさらす政治をやっているのです。

アベノ国家主義—排外主義

このひとは元々戦後レジーム(体制)の総決算という自民党の右派政治の脈略の中で台頭してきたひとです。そもそも戦後レジームの総決算というのは何なのかということがあります。戦後レジームの総決算をする前に、戦前・戦中のレジームの総決算をするべきなのです。それをきちんと為さない中で、戦後レジームの総決算などということばが出てくるのです。そもそも、戦争と植民地支配の反省がないのです。わけの分からない歴史学者や政治家がいます。「新しい歴史教科書」を作ったひとたちやそれに賛同する政治家です。その考えと、アベノ政治認識は共鳴しているのです。それは、負ける戦争をしたのがいけなかったとか、強いられた戦争だったとか、いう意味不明なことを言っています。資源がない中で、経済制裁されて資源を求めて「海外進出」をしたのだとか、言っているのですが、そもそも経済制裁されたのは、国際世論で認めがたい植民地支配を進めて行ったからです。この論理でいくとお金や食べるものがなかったら、泥棒するのは当たり前という論理です。そんな論理を振りかざしたら、資本主義社会は、その秩序は成立しなくなります。当時は、まだ植民地支配が旺盛な時代でした。そのことが、世界的な資本主義の脱植民地化の中で、もはや成り立たないと、別の形での経済体制をつくり出したのです。だから、「海外進出した中で、その国の中に感謝しているひとたちがいる」ということは、脱植民地化のなかで時代錯誤の論理です。どの国にもおかしなひとはいます。しかし、大勢の世論や国家として感謝宣言している国ありません。それから東京裁判批判があります。戦勝国から押しつけられた裁判で、一部のひとに戦争責任を押しつけられたという論理です。そもそも、戦争評価の問題から始まるのですが、自分たちが戦争やファシズムを阻止し得なかったというところで、自分たちの自らの手で、戦争責任を問題にしえなかったという反省がないのです。それ以前に戦争とファシズムに反対する勢力を徹底的に弾圧し、獄中に閉じ込め、獄中死させることによって、成立した軍国主義的総動員体制のなかで、戦争と植民地支配の遂行が成立したのです。

政治家の靖国神社詣でがあります。国家神道ということで、軍国主義の象徴として靖国神社はあります。ですから、戦争責任ということであれば、真っ先に廃止するか、政治と切り離れた宗教団体にすることだったのですが、天皇制とともに、これを存続させた事が誤りだったのです。

その中で「英霊」というキー概念があるのですが、これはまさに、宗教用語なのですが、政教分離でこのような概念は使えないはずなのです。だから、単に「英雄」というところに押さえ直すなら、戦争の反省ということであれば、「英雄」は戦争に反対したひとたちのはずです(それでも、戦争を阻止し得なかったというところで、そのひとたちにも戦争責任から逃れ得ないということがあります・・・これは原発事故が起きたときに反原発派の学者が、真っ先に止め得なかった反省を口にしたことに通じます)。A級戦犯を合祀する以前に、軍国主義の象徴であった靖国を参拝することはゆるされないのに、まして、合祀してあるところに参ったら、戦争の反省を反故にしたととらえられるのは当たり前ではないでしょうか？

そもそも、政権を担う政党から、靖国参拝をするひとが出るというのは、戦争の反省を反故にしたとということで、外交関係を損なうとして、即刻党から除名することのはずで

す。ところが、首相自ら参拝するというおそろしいことをやっているのです。

おまけに、外交関係を損なうという予測ができるはずなのに、諸外国からずーっと「やめて欲しい」と言われ続けているのに強行したのです。そもそも、政治家というのは、基本的人間関係の常識を理解していなければ務まらないのですが、このひとは「相手のいやがることはしない」という人間関係の常識さえ分かっていないのです。その上で、相手をなぐっておいて、一応その反省と謝罪をしたのに、それを反故にするようなことをくり返していくのです。なぐったひとは、一応謝罪して、それをまた反故にして、おまけに「いつでも、わたしたちは開いている」などという本末転倒の発言をすれば、「反省はうそだったのか」と「火に油を注ぐ」一怒りを招くことです。

そして、中国の覇権主義的動きを「力による国境線を変更することは許されない」と言い出す始末です。「侵略の定義はいろいろある」と、意味不明の発言をしたひとですが、これはまさに侵略の定義です。日本が過去にやったことの反省をちゃんとしない、一応反省したことを反故にしようという本音がここにも現れてしまっているのです。

日本には、いろいろ友好的な人間関係を作り、維持していくためのことわざというものがあります。「人の振り見て我が振り直せ」ということを理解していないのです。他者を批判する前に、自分たちが過去にもっと明確にひどいこと(戦争と植民地支配)をしてしまったことをちゃんと反省しない、どうしようもない政治家なのです。

そんな政治が外国で、どのように見られているのでしょうか？ 経済的關係で、中国の覇権主義との関係でかろうじて相手にされていますが、冷ややかに見られ、孤立していく政治を押し進めているのです。APECで孤立感を味わっている姿がまさにそれを象徴しています。

「女性の活躍」といううそ

さて、少しは評価できることがある、という意見がでてきそうです。それは「女性の活躍」というごまかしです。

そもそも、なぜ女性がこれまで排除されてきたのかというとらえ返しがありません。これは男を企業戦士にするために、性役割分業(ジェンダー)で、専業主婦や女性のパート労働化ということに女性がおかれたからです。だから、女性が男性と同じような働く環境を作るためには、家事の分担化と労働中心の生き方を転換していかなくてはなりません。フェミニズムは「女が男なみに働くのではなく、男が女なみに働く社会を」という提起をしていました。

アベノ政治には性差別をなくすという発想はありません。一部の「有能な」女性を男なみに働ける環境を作るというところしかないのです。多くの女性はパートと専業主婦という立場におかれたままです。そのひとたちの置かれている状況を変えようという意思はないのです。

そもそもこの「女性の活躍」は、最初「女性の活用」という言い方をしていたのです。とことん企業目線なのです。財界からすでに、クォーター制という性差別に対するアフターマティヴ・アクション(積極的差別解消策)導入を警戒することばがでています。

従軍性奴隷制における当事者の痛みをとらえ返す姿勢は皆無ですし、むしろなかったこ

とにしようというひとが、性差別的なことをなくそうという政策を進め得るわけがないのです。

そんなところで出てくる「女性の活躍」という政策はごまかしの政策にすぎません。

アベノ政治手法

まじめに対話する意思のない政治家には、斜に構えて批判する手法が有効です。アベノミクスになぞらえて、アベノ政治手法をアベノウソツキー、アベノゴマカシー、アベノタイワナッシー、アベノムセキニズということでおさえてみます。

(1) うそを平然とくり返す政治(アベノウソツキー)

このひとの政権奪取はうそつきから始まりました。民主党政権のときの野田首相と国会の党首討論で「議員定数の削減をしますね」という確約の元で、衆議院解散に至り、アベ政権が誕生したのです。その約束を、なんやかんやのごまかしの理由をつけて、反故にしたのです。そして、オリンピック誘致の演説でフクシマをアンダーコントロールという大うそを世界に向けて発信しました。東京オリンピックが決まった後に、汚染水もれがマスコミで大々的に流れました。そして原発の安全神話の大うそがフクシマで発覚したのに、そして、事故の際の、対応しきれなかった技術を、原発の海外売り込みのなかで、「世界に誇る技術」などという大うそをついています。そして、再稼働策動の中で、「世界一の安全基準」という大うそをついています。そもそもヨーロッパではもっと格納容器の安全性で、厳しい基準で動かしている原発がありますし、そもそも、地震や津波を想定しなくてすむ国に比べて安全基準が高くなるのは当たり前です。新潟県知事から、原発の避難計画で「うそつき」と言われたことにも端的に表れていますし、その後の川内原発の再稼働策動の中で、「十分な避難計画ができています」という大うそもつきました。「うそつきはどろぼうのはじまり」ということばがありますが、このうそつき政治の繰り返しの中で政治不信を生み出し「うそつきは政治家のはじまり」という新たなことばを生んでいく状況に陥ります。アベノ政治はむしろ、政治不信の増幅によって、政治ばなれを生み出し、そのことによって政権維持をはかろうとしているのかもしれない。

沖縄の辺野古基地移転で、県外移設を公約にして当選したうそつき知事は再選されませんでした。うそつき、ごまかしの政治は一時しか通用しないのです。通用させないようにちゃんと暴いていくことです。

(2) ごまかしの政治(アベノゴマカシー)

「うそつき」と批判される中で、「うそつき」と言われないようにと、ことばの前に限定することばをつけたりしています。

「わたしが政権を担当している間は・・・」とか、「そういう意図はありません」とか、「わたしの責任で」、「もしそういう事態になったら、首相を辞めます」という発言にそのことは現れています。これは自民党政治伝統のなし崩しのごまかしの政治手法です。

外交関係をめぐるとごまかしは前述しました。その中で、かかげる「積極的平和主義」ということばのごまかしがあります。これは冷戦時代の核の傘による、「力の均衡による平和」という幻想でしかありません。「力の均衡による平和」は現実にあったのでしょうか？ 現実には戦争がなくなったという事態はありませんでした。朝鮮戦争があったし、ベトナム戦

争、アフガン戦争、湾岸戦争、そしてアメリカの「自国民」をまもるというごまかしによる軍事的介入は、その間に続いてきました。そして、戦争の形態は変化してきていて、テロリズムという戦争に転化してきています。積極的平和主義というのは、軍事的解決によらない、外交による問題の解決ということで、格差や飢餓のない世界の構築というなかで、テロリズムも起きないような平和な世界を作るといことのはずです。アベノ政治の「積極的平和主義」というのは、軍事力を背景にした旧態依然の力の均衡による「平和幻想」のばらまきです。日本は憲法九条や「集団的自衛権」の否定によって、本格的戦争へのまきこまれを抑止してきたのです。アベノ政治の「積極的平和主義」というのは、戦争への加担による「幻想としての平和」な世界を夢想しているにすぎません。大うそ、ごまかしの標語なのです。公明党との間でごまかし方の協議をし、戦争参加の歯止めをかけているとか、自分が首相をしている間は・・・、とか言っても、安全保障のことで、これまでなし崩し的に戦争参加の途を作ってきた歴史を見ると、それはごまかしだというのは明々白々です。

さて、今回の衆議院解散が、まさにアベノゴマカシーを端的に示しています。

「消費税の再アップを先延ばしにするので、それを選挙で問う」と最初言っていました。そもそも、再アップを主張している「主要」野党はないので、争点になりません。で、それではごまかしができないと、「アベノミクスの評価を問う」ということを今度は突き出してきました。ですが、そもそも、消費税の再アップということ为先延ばしした時点で、破綻が露呈しているのです。だから、破綻がもっと明らかになる前に、「ごまかしの選挙を」ということでしかありません。

解散前に首相自らテレビに出て、雇用が拡大したといつものようにごまかしの話をしていました。公共投資をしたらその分雇用は増えます。123万人の非正規雇用という不安定な一時的雇用が増えただけです。恐ろしいことに正規雇用が22万人減っているのです。今回増税を見送りました。それで新たな経済政策といっているのですが、また旧態依然の公共投資をするつもりなののでしょうか？ 財源はどこにあるのでしょうか？ おまけに福祉の切り捨ての話まで出ています。結局、大企業のための政治をとことん推し進めているのです。

(3) 対話のない押しつけの政治(アベノタイワナッシー)

国会での首相答弁をみていると、論点ずらし、議論をかみあせる意思のない、言いたいことを言うだけの対話のない政治をやっています。おまけに、相手の言葉尻をとらえ質問者を非難するということを得意にしています。

解散前のテレビ出演で、そもそも対話する意思のない、一方的に自分の言いたいことだけ言うという態度で、対話のルールも無視してしゃべりまくっていました。まさに対話のない政治家の姿を現していました。さらに、街頭インタビューを流していたのですが、アベノミクス批判がでてくると、批判をする意見を取りあげたマスコミが偏ったとりあげをしているかのように批判をする始末です。わたしは、そもそもマスコミはむしろ、公平性みたいなどころにとらわれて、はっきりとした批判を街頭インタビューでとりあげていません。取り上げるときには、学者の意見として両論とりあげるというような姿勢なのです。マスコミは、きちんとした議論の場をつくることもしていません。そもそもアベノ政治はそんな場を作りはしないからでしょう。そして、「集団的自衛権」のときも、国会での議

論をちゃんとしないで閣議決定を強行するのに、マスコミに出て、対話のない言いたいことを言うような手法自体がおかしいのではないかと思うのです。

「議会制民主主義」の中では、「国民世論」の動向を押さえながら、批判をきちんと受けとめて(少なくともそのポーズをとって)、対話ある政治を進めるのが(形式的)原則です。ところが、アベノ政治にはその対話のポーズさえないのです。

そもそも野党時代にNHKに圧力をかけていました。そして、政権をとると、人事で自分の意向に合うひとにすげかけをくり返していきます。NHK、「集団的自衛権」を巡る内閣法制局長のすげかえ、原子力規制委員会を「推進委員会」にしてしまう内容での強引な人事です。そもそも審議会の類の人事は最初から政府や官僚の意向通り答申がでるような人事をはかるものですが、これほどまでに露骨な人事をやった政権はありません。自分のやりたいことに同調するひとたちを周りに集め、その意見だけで政治を進めようとしています。

その手法は、原発の安全神話作りでの東大論法に似ています。インターネットのユーチューブで、原子カムラの学者と反原発の学者との事故以前の公開討論が流されていました。それは、周りにサクラを配し、どんなウソでも確信的発言をし、サクラに反論を封殺させてまかり通すのです。そもそも、ちゃんと議論をしよう、説得しようという意思がないのです。

そして、原爆忌に出席した後に被爆者団体から、脱原発の意見が出されたことに「見解の相違です」と切り捨てました。このひとには「国民」とさえ、きちんと対話する意思がないのです。前述したように、過去の戦争と植民地支配の被害を受けた国のひとたちの気持ちとの対話、そして「友好国」のアメリカの意向も無視して、靖国参拝し、それでアメリカさえからも批判を受け、外交関係に行き詰まっても、いまだに、靖国にかかわり続けています。

その対話のない押しつけの政治に必然的に起きてくる批判をかわすために出てくるのは、情報隠しと言論弾圧です。これを「特定秘密保護法」という形で、やってきています。フクシマのときに、後になってちゃんと情報を流していたら、被曝が軽減できたのにと問題になったスピーディを、なんと廃止しようとしています。情報操作や情報隠しから、パニックや風評被害が拡大するというのに、まったく逆のことをしようとしているのです。情報操作や情報隠しはまさにファシズムの始動なのです。

(4) 責任ということばを言う無責任(アベノムセキニズ)

前述しましたが、原子カムラの東大論法で、きっぱり言うと真実のようにまかり通るということで、アベノ手法として「責任をとる」とことばをよく使います。

その中身がないのです。「責任をとって首相を辞める」というのは、責任を放り投げるといってしかありません。責任をとるといって、何かあったときに、それを元の状態にリセットしてから辞めるというのが「責任をとる」ということです。また、誰かそれをリセットしてくれる範囲のことであれば、「責任をとって辞める」ということですみます。それがリセットなどできない問題のとき、「責任をとる」などと言えません。

原発事故で、だれひとり責任をとっていません。現行の法体系では、損害賠償をやるのは電力会社の「国民」に責任を転化する電気料金の値上げや、国の税金です。推進・維持してきたひとで、一体だれが責任をとったのでしょうか？

現行の法体系では、個人に責任をとらせるシステムがありません。その責任をとらせるときは過去にさかのぼって裁き得る「人道に対する罪」に関することです。この原発事故も、そして前述した「戦争と植民地支配」も「人道に対する罪」です。前者は責任をとっていないし、責任追及もしようとしていません。後者は、自分たちで責任追及をしないで、戦勝国に責任をとらされたと批判しているのですから、そんなひとが「責任をとる」ということばを使う資格はありません。

原発の再稼働策動を進めています。ところが、これに関して「事故が起きたら、わたしが責任をとる」というひとはいません。そもそもどうやって責任をとるのか、自分の全財産を抛出するとか、責任をとって事故処理の仕事をやりますとか、言っているひとはいません。そもそも、国も電力会社も賠償も放り投げようとしています。そして、事故直後、「原発の事故で死んだひとはいない」とか言っていた推進派のひとがいましたが、福島県の震災関連死は直接死を上回りました。他県の直接死と震災関連死の割合から推察すると、現時点で原発事故関連死は概算千五百人くらいの数になるのではと類推しています。それに、これから明らかになってくる身体的な放射能被害。そして、避難生活をしているひとたちの苦しみ。放射線被害の恐怖。「人道に対する罪」で裁くと、死刑制度は「人道」に反するし、責任の昇華にしかならないのでとらないとして、アメリカの懲役加算方式でいうと、懲役何十万年一何百万年の罪になります。どうやって責任をとるのでしょうか？ 責任をとれないことをやるべきではないのです。それを世論も無視してやろうとしています。

むしろ、自民党政治は首の据え替えによって責任をたらい回しにして、右派は「戦争ができる国」になし崩し的に世論作りをして行く手法をとってきました。だからだれも責任をとらない政治なのです。

いのちと生活を軸にした「政治」か、いのちと生活を破壊する経済成長の幻想にとらわれた国家主義の政治かという大きな選択が突きつけられています。

原発の再稼働とその反対運動はそのことを明確に体現しています。

そして、ファシズムの本格的台頭の危機をアベノ政治はもたらしています。ファシズムの台頭は運動を根こそぎ消え去せます。

そのことを押さえ、ファシズムの台頭を叩くことが今必要なのです。

このアベノムチャクチャ政治に NO の意思表示が必要なのです。

(み)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 49 号」アップ(14/11/28)
- ◆HPの容量がオーバーしてきて、「反障害通信」の旧い号を消去し始めました。バックナンバーの欲しい方にはメールなどでお送りします。
- ◆ホームページもブログも少し読みやすくするために整理しようと思っています。バタバタしているので、少し落ち着いてから。

情況への提言詞(2)

原発の責任を問う

日本の戦後政治の混乱は
日本が自らの責任を考えず
自らの手で戦争責任者を裁けず
連合国に委ねてしまった事から始まった

わたしたちには
ひとつひとつの責任を考え、反省し
自らの手で追及していく責任がある

フクシマの責任を考えよう、とらせよう
安全神話を作り、維持してきた責任をとらせよう

福島のご郷を奪い
原発事故関連死を作り出した責任を考えよう、とらせよう

これから顕著にあらわれてくる
放射線の被害の責任を考えよう、とらせよう

原発の再稼働を進めるひとたちに
人道に対する罪として
A級責任をとらせよう

フクシマの事故が起きたときに
推進派は一切責任をとろうとしなかった
反対派は阻止し得なかった責任を自らに問うた

事故が起きる前に
その前に
自然に適わぬ原発の
再稼働をなんとしても阻止しよう
それをわれわれの責任として

(フクシマを心に刻み、継続した取り組みのために(3)としても)

情況への提言詞(3)

わけのわからぬ許し難いこと
いのちと生活をおびやかし、金儲けを優先させる
うそとごまかしと無責任で遂行しようとする原発再稼働

戦争を担い遂行した「亡国」の戦争責任をスポイルした
「英霊」を弔うという靖国参拝

戦争責任を自ら追及できず、他国にたなあげし
「他国に押し付けられた東京裁判」とあげつらうひとたち

戦前・戦中レジュームの総決算もしないで、
「戦後レジュームの総決算」だけを叫ぶひとたち

自分たちが侵略・植民地支配し国籍を押し付け、そして一方的に奪い
その結果生じた問題の解決をしようとし不在日外国人無年金問題

権利を奪われたひとたちの特権を勝手に言いつのり
廃止しろというヘイトスピーチ

犯罪の発生率も再犯率も低いのに
再犯の可能性など予期できないのに
予断と偏見で作られた医療観察法

読書メモ

今回は「障害者自立生活運動」関係の本です。中西さんは労働・契約型の介助指向で、市場経済の枠組みのなかでの運動作り。新田さんは共同性の追求型の運動展開というところな方になると思います。

もう一冊、脳死・臓器移植反対関係の講演会があり、それに参加予定していて、その講師の本を読みました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 275

・中西正司『自立生活運動史—社会変革の戦略と戦術』現代書館 2014

この著者は日本で自立センター系の自立生活運動を立ち上げたひとで、日本の「障害者運動」において強力なリーダーシップを発揮したひとです。

「障害者」の運動と組織のプロというような雰囲気をもったひとで、「障害者運動」の基本的理念をしっかりと押さえ、その形成も担ったという、日本の「障害者運動」を語る上で、

このひと抜きには語れないというような存在ではないかとも押さえています。日本の「障害者運動」において、個別「障害者団体」における活動も押さえていかなければならないのですが、アクセスというところで、他団体との「障害」の垣根を越えた連帯もはかり、2003年自立支援法上限問題や「障害者権利条約」の制定の国際的な動きの中で、日本における「障害者団体」の統一した行動の模索においても、その役割をにない、そしてアジアにおける「障害者運動」連帯と支援という観点ももって、広い観点から、従来の枠組みを超えた活動をしてきたひとです。

運動を作る作り方のようなことや、政治的交渉のノウハウのようなことも示してくれています。「障害者運動」を担うひと、そして「障害者運動」の「組織化」—仲間作りを担うひとにとってこの本は必読書だとも言い得るのではないかと思っています。

この本の著者の中西さんの本は3冊目です。

最初は上野千鶴子さんとの対談的な本『当事者主権』岩波新書2003で、2冊目は同じく上野さんとの共編著『ニーズ中心の福祉社会へ—当事者主権の次世代福祉戦略』医学書院2008です。フェミニストとの対話のなかでの本で、枠組みを超えた広がりを見据えたところでの運動に開いていく可能性を示しています。

さて、運動というのは試行錯誤していくことで、そして新しくいろんな考えを取り込み乍ら進んでいくことです。たとえば、著者の最初の共著では、どうしても医学モデルとしかとらえられない内容で、話を進めていたのですが、ここでは、「社会モデル」の立場で、医学モデル批判を展開してくれています。このあたりは、日本的にも世界的にも「障害の社会モデル」が整理されていないところから来ているのですが、医学モデルへの引きずられが生じていて、「社会モデル」ということが押さえきれていないのではないかとわたしは感じてしまいます。「障害は個性である」というとらえ方は、明らかに古い医学モデルでしかありません。そして、運動的なことを書いて置くと、わたしはこの著者からどうして介護保険への統合反対ということが出てきたのかが、分からないのです。介護が必要になった高齢者は、「社会モデル」でいえば、明らかに「障害者」です。なぜ、「障害別」で排除しない運動という観点をもっている著者が介護保険から、「障害者」の切り離しを最初から提起したのか分からないのです。これは著者自身が長期的には、福祉総合法という形で提起しえることと書いていますが、その観点からも分からないし、結局「障害者」も介護保険制度にとりこまれてきていることをとらえると、その判断が理解できないのです。現実的な既得権の擁護として、切り離しをはかるという判断がでていたのかもしれませんが。

さて、もうひとつは、著者は有能な運動家であり、組織者で、たとえば「生活保護」をもらっているが、その分は運動という形で社会的貢献をしているというような文がでてくるのです。現実に運動というのは、有効性が求められます。ですが、この有効性や能力ということがそもそも障害差別の根底にあるのではないかとわたしは押さえています。青い芝の横塚さんは、そのあたりのジレンマを「はやく、ゆっくり」ということばで表現していました。著者の文のなかにも、そのあたりのジレンマのようなことは出ています。しかし、どうも能力主義の方に青い芝のひとたちよりもズレてしまっているのではないかと感じてしまうのです。そのことは、当事者ということ、運動を担うものが当事者であるというようなとらえ方にも現れています。わたしは当事者ということ「差別を受けるもの」

というとらえ方をしています。運動を担うものという意味では当事者主体の主体形成というところで押さえることだと思っています。そのあたりを区別しないと、「唯の生」（これは著者が何回か評価的にとりあげている立岩さんの本のタイトルになっています）、それからすべてが始まる大切な概念で、「唯生きていること」を大切なベースとして、そしてそこから、そのことをすべてのひとに保障する、だから、むしろ生きることの困難さを抱えさせられていることのひとを中心にすすめることによって、より良い社会が作れるという、「障害者運動」の基本概念が作れるのだとも思っています。それが、総合福祉法を作る上での、「基本生活保障」ということにもつながっていくのだと思います。このことは、障害問題でもベーシックインカム議論として進んできています。

さて、欧米の「障害者運動」や制度から、著者の福祉制度論をとらえ返してみます。アメリカの「障害者差別禁止法」たる ADA 法作りを中心に担ったのは、著者と同じ立場の、「有能な脊髄損傷の中途障害者」でした。で、「福祉の対象にするよりは、税金を納められる存在に」というところで ADA 法をつくるロビー活動をして、結局「能力のある障害者を差別してはならない」というところに陥ったと批判されていることがあります。著者はそのあたりのことは書いてくれています。能力主義的なとりこまれと、能力主義批判のところ、ふりががふられているのです。実は、著者が強力に推し進めた自立生活センター系の自立生活運動はアメリカの自立生活運動からまなび、それを更にすすめたこととして展開されたのだと、この本の中にも書かれています。自立生活運動の精神と ADA 法の精神のズレもあるのですが、アメリカ的な極的な能力主義とそれへのとりこまれ批判がどこまでなされているのか、そのあたりのことをもう少し展開して欲しいと思うのです。実は、著者の他の本や、書かれた文を見ていると「自立」を求めるアメリカ的なことよりも、スウェーデン的な福祉国家論から、福祉の未来を見ていた様だったのですが、この本の中では、そのような展開はありません。スウェーデン的な福祉国家論への、問題点を抱かれたのでしょうか？ そのあたりも深化した形で是非今後出して欲しいと願っています。

ちょっと読書メモから外れていくのですが、わたしは、「そもそも障害とは何か」というとらえ返しをして、そこから福祉の問題をさらにとらえ返そうとしてきました。その立場でベーシックインカムと北欧型の福祉施策という二つの福祉の動向にコメントしてみます。

まずベーシックインカムですが、ベーシックインカムを実現している資本主義国家はありません。「生活保護」のようなことも、内実は、権利としての福祉ではなく結局恩恵としての福祉に陥っています。そもそもベーシックインカムは、資本主義とは相容れません。資本主義は働かなければ食べられない労働者と、資本を市場に投入しなくても生活できる資本家の非対称性において成立しているので、「権利としての福祉」であるベーシックインカムが成立すると、労働者も労働力市場に自らを投げ出さなくてもすむようになり、非対称性が崩壊する、資本主義は崩壊するのです。だから、市場経済をなし崩し的に否定していく論理がベーシックインカムの議論の中で出ています

次に北欧型の政策ですが、は競争主義と能力主義にとらわれたエリートと競争から一定距離において、自分の家族や生活をエンジョイする労働者に分離しているのだと思うので

す。ダブルスタンダードになっているのです。それはわたしは結局ギリシャの奴隷制度のようなこととしてあるのだと思います。エリート—市民と賃金奴隷制における労働者—奴隷という対比から抜け出せていないのです。そして、エリートの支配を許しているのは優生思想なのです。結局、北欧の「障害者」も障害の医学モデルや優生思想から逃れ得ていないのです。「障害とはなにか」ということをとらえ返した、「障害の社会モデル」への転換、優生思想への批判を完遂していかない限り、「障害の否定性」から逃れ得ないのです。そのことはわたしが出した本『反障害原論』の中で一応展開しました。とても、対話になっていないという批判を受けて、もっと分かりやすく、届く作業をしていかないといけないのですが。

たわしの読書メモ・・ブログ 276

・新田 勲『足文字は叫ぶ！—全身性重度障害者のいのちの保障を』現代書館 2009

ブログ 255 の渡邊琢『介助者たちは、どう生きていくのか—障害者の地域自立生活と介助という営み』生活書院 2011 で、介助を求める「障害者」当事者の運動の大きな流れを押さえています。それで、この著者の新田さんは、前回のブログで紹介した著者の中西さんの自立生活センター系の対極にいるひとです。

府中療育センター運動から自立生活運動ということに入り、「在宅障害者の保障を考える会」から「全国公的介護保障要求者組合」という形で運動を進めてきたひとです。まさにこのひとは日本の「障害者」介助要求ということを切り開いてきたひとなのです。

この本を読んでいて、想起したのは青い芝の横塚さんの遺言的提言「心の共同体」ということばです。

新田さんはまさに、介助者の生活をどう成り立たせるのかということも共に追い求め、共同性を追求し続けたひとです。

青い芝の行動綱領をはじめ、なかなか理解されないのですが、この社会で自らの存在を否定される「障害者」が、その否定に対する巨大なアンチとして突き出すラジカルな提起なのです。その存在を否定されるということの当事者としての思いが、非当事者にはとらえにくいのです。ですから、そのアンチのもつ意味の大きさということがとらえられないのです。このひとは青い芝が突き出した行動綱領の「問題解決の途を求めない」ということをずらして、「求める運動」に踏み行ったひとと言い得るでしょう。

アンチということは整理されないままに突き出されます。だから、それを表面的にとらえてしまうと、論理的におかしいとか、前に言われている事と後で言われていることが矛盾しているというようなとらえかたもしてしまいがちです。この本の中で出てくることで端的におかしいと批判されるであろうことは、「異性介護バンザイ！」というようなところでしょう。対的なことと共同的なことをごっちゃにしているととらえられます。しかし、このことも含め、アンチ的な提言はテキストクリテックしながらよみこんでいくことなのではないかと思うのです。この本の中で対談者として出てくる立岩さんのいえば(わたしの勝手な解釈でしょうが)、「整理できないまでも、出せる要求は出せるだけ出してみる。整理できない中でも、とにかく提言してみる」というような、提起なのです。

さて、「障害者」運動の中では、法律用語でなければ、「介護」ということばでなく、「介助」ということばを使っていることが多いようです。「護る」という言葉が保護的なニュアンスがあり、差別的だということ。しかし、著者は一貫して、「介助」でなく「介護」という言葉を使っています。このあたり、「重度障害者」にとって、「見守り」という介護の必要性を訴え、行政と交渉をしてきたところから出てきているのではととらえ返していました。

このひとには、青い芝の行動綱領の「健全者文明を否定する」ということを連想させる「資本主義」批判という観点もあったようです。

この本の最後に「“いのち”はなにのものにも優先する」という言葉が出てきます。まさに、このことにおいて、このひとは運動を進め、そこで共同性を追い求めていたひとです。昨年一月亡くなっています。いのちをすり減らして、いのちをかけた運動の中での死でないかと思えます。

合掌

この本の中で、「介護者」の深田さんが、この著者のとりわけ入浴時の向かい合う「介護」要求について書いていました。深田さんが本を出しています。ちょっと、急ぎの読書があるので。一冊間に挟んで、次々回の読書メモに書きます。

たわしの読書メモ・・ブログ 277

・山崎光祥『子を見ると、子を看取るとき——沈黙の命に寄り添って』岩波書店 2014

この本は、前半は出産時臍帯脱出によって、「低酸素性虚血性脳症」で、「脳死に近い状態」になった子どもを看、看取った記録です。

著者は読売新聞の記者で、後に医療関係の取材に当たり、娘の医療の検証を含めて、脳死、脳死に近い状態の子どもの医療、そこから問題になっている脳死・臓器移植の問題で取材をして、丁寧な記事を書いて、特集記事にしていったようです。それが後半の文章になっています。

脳死とかそれに近い状態の子どもには意識がないとかかれて、「苦しませるだけ」とか、「無駄な医療」とか、いわれるのですが、そうではない、子どもの生きているということにおける、生きる意志をとらえ、むしろそのことを周りが支えることにより、何のものにも代え難く生み出されることの大切さを訴えています。そして、現実の支えきれない態勢の批判をしています。

この本は脳死・臓器移植を正面切って全否定していません。親の立場で、移植を受ける親の思いをも含んでとらえ返そうとしています。自分の子ども、そして脳死に近い状態とされるいろんな子どもへの看護の記録から、そもそも脳死とは何かをとらえ返すことにより、「脳死は人の死でない」ということを突き出しています。

さて、いつものように切り取りメモを残します。

＜生まれた時から今の状態なのだから、愛実(著者の子どもの名・・・引用者)がそれを惨めだと思わないはずだ。自分ではこれほど真剣に生きようとしたことなどなくせに、早く楽にしてあげた方がいいと一瞬でも思ったのは、結局は自分が介護の負担から逃

れたかったからではないのか。強者の価値観や都合を弱者に押し付けるとは、どれほど思い上がった発想だったか>60-61P

医者言葉「私は脳死とはお母さんがその子が亡くなることを受け入れる猶予期間だと思っ
ています。そういう時間をその子がお母さんに与えているんだと思います。」 161P

別の「脳死的状態」の子どものお母さんのことば「「脳死は人の死」と言う医者は、こ
ういう子と一週間でも、二四時間一緒に生活してみたらいいんです。」 204P

日本臓器移植ネットワークのホームページの文書に、「長期脳死」ということが書かれて
いない中で、それに代わる文として「心停止までに、長時間を要する例も報告されていま
す。」があることが紹介されています 206P。この「要する」というのは、わたしには「死
ぬのを待っています」という恐ろしい文にとらえられるのですが。「いのちのリレー」とか
いう、ごまかしの文言があるのですが、これがまさに脳死・臓器移植問題の本音としてあ
るのではとぞっとしていました。

(編集後記)

◆前回の「通信」に次回の巻頭言はアベノ政治の「女性の活躍」のごまかしについて書
くと予告していたのですが、アベノ政治はおそろしく欺瞞的な衆議院解散に打ってでまし
た。まさにごまかしの政治の極です。わたしにはまさに「ハダカの王様」的にとらえら
れるのですが、「ハダカの王様」にはひとりで「ハダカの王様」だと言っているでも仕方が
ないので、みんなで、その呪縛から解き放たれるために、急ぎ文にしました。

◆さて、選挙ですが、わたしはそもそも議会制民主主義は幻想だと批判してきました。
選挙制度は民意を反映しないように改悪され、そして国会での議論は、次の選挙に向
けたパフォーマンスになりすぎて、質問時間のわりあてで、ちゃんとした議論もでき
ないようなシステムをつくりあげています。そして、国会はまさに国のシステムとし
てあり、当然「国」という論理にとらわれ、そもそも戦争の道に踏み込んでいく国家
主義批判ができないような場になっています。そのようなシステムのなかで、議
会から社会を変えるということは起きなくするシステムを作りあげているのです。

そもそも政治不信や政治離れは、そのような政治のなかで、「社会は変わらない」と
いう絶望からきています。だから、議会制民主主義の幻想自体を指摘し、むしろ幻
想にとられない、草の根からの運動の創出を提起してきました。だから、間接的
政治よりも直接的政治をとということで、選挙ボイコットという方法もあるし、
かつてはわたしもそうしていたのです。

ですが、議会の場で実際に予算ということ、福祉が切り捨てられると、その
ことがひとの命と生活を切り捨てていくこととなります。だから抵抗の政治が、
国会でも必要です。また、選挙や国会の議論を運動づくりのテコには
できません。

アベノ政治のファシズム的動きに呼応した、「在特会」などのファシズム勢力の
台頭も出てきています。ファシズムは、すべてを根こそぎに消し去ります。
抵抗の運動は全方位的

に展開しなくてはなりません。そのような中で消去法になりますが、少しでも、いのちや生活を破壊しない方向の政治勢力への投票が必要になっています。

◆自然エネルギーによる「エネルギー革命」と経済成長のことを書きましたが、現在の新自由主義的グローバリゼーションの中では経済成長は、結局格差の拡大しかもたらしません。そして、感覚で書いてしまいましたが、そのエネルギー革命の経済成長に寄与するスパンはせいぜい三十年くらいです。そもそも環境破壊に右とか左とかないのです。中国が京都議定書に経済成長優先で反対して、現在PM2.5などで、北京の空がどうなっているのでしょうか、公害輸出国にさえなっています。

◆提言詞の「わけのわからぬ・・・」ということは、実は、「おかしい」ということがもともとはっきりしていること、「どう考えてもおかしい」ことなのです。そこから、トータルにとらえた運動、「いのち生活が一番」の運動の突破口も開けていけることではないかと思えます。

◆読書メモは「自立生活運動関係」の本二冊。「障害者運動」で最も獲得していった地平が大きいのは、自立生活運動における公的介助保障要求の運動だと言われていますし、わたしもそのように押さえていました。わたしは青い芝関係の初期の活動は一応押さえたのですが、このあたりは生きるための闘いという性格があり、現実主義的になっていく当事者主体の問題があり、いろいろコメントしていくことにためらいがあり、きちんと押さえる作業をしていなかったのです。また、マージナルな立場から、「障害とは何か」の原論的なところを主要課題としてきたこともありました。ですが、イギリス障害学の「社会モデル」をめぐる、「impairmentの個人的苦悩をスポイルしている」という「フェミニスト障害学」への再批判の核心的な問題にもつながっているので、やっと読んで、あえてコメントしてみました。

◆この「通信」編集に入ろうというときに、日本で2例目の子どもの脳死・臓器職のニュースが流れてきました。そのニュースを流すTBSの「ニュース23」のその番組の画面上右端に「命のリレー」などという文字が出ていたのです。親の意思で脳死・臓器移植をしたのですが、「命のリレー」というごまかしの美辞麗句へのまどわされと合理化のようなことを感じてしまいました。ここにも、なし崩しの政治の進行があるのですが、きちんと、押さえ直す作業の必要性を感じています。

◆マスコミがどうも情報規制しているようで、沖縄の辺野古での、移転阻止の闘いなどを流しません。アベノ政治は、朝日パッシングをし、マスコミに選挙報道での「要望書」など出したり、報道規制に乗り出しています。F・Bなどでき情報を受け取るだけだったのですが、今回は発信します。

◆今回は巻頭言で、新年に、これからの課題を出してみます。読書メモは、「障害者運動」を押さえる作業の続きですは

反障害－反差別研究会

■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたち

は「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

ホームページトップ

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/httpwww.k3.dion.ne.jp~adsnews.html.html>